

インド北西部の糞^{ふん}の話

インド北西部のハリヤーナー州、ラージャスターン州、グジャラート州での事例です。同地域は半乾燥帯に属しており、雨季と乾季があり、日本に比べればたとえ雨季といえども乾燥しており、湿気が少ないため糞はそれほど臭いません。また、当地は植生がそれほど豊かなわけではなく、人口が激増しているインドの村人の日々の生活を支えるだけの薪炭を供給するのは物理的に不可能です。そこで多くの人びとに利用されているのが、燃料としての家畜の糞なのです。

燃料として利用されるのはコブウシやスイギュウの糞です。コブウシは、インドの多数派を占めるヒンドゥー教の神聖な動物として屠畜されることは少なく、耕作や運搬などの使役動物、貴重なタンパク源であるミルクの供給源として重宝されています。スイギュウもまた、肉食が忌避される宗教上の理由によりあまり屠畜されず、使役動物（ハリヤーナー州以外ではあまり使役されていません）や、コブウシよりも多い脂肪を含んだミルクの供給源として多くの家庭で飼われています。そのため、インド北西部の村落部では、燃料として利用できる家畜糞には事欠きません。以下に燃料として利用される牛糞ケーキの製作、保管、利用方法を紹介していきます。

牛糞を混ぜ合わせる女性

まず、燃料となる家畜糞は、乾燥する前に集め、穀類などの植物残渣と混ぜ合わせます。これは女性の仕事です（写真①）。

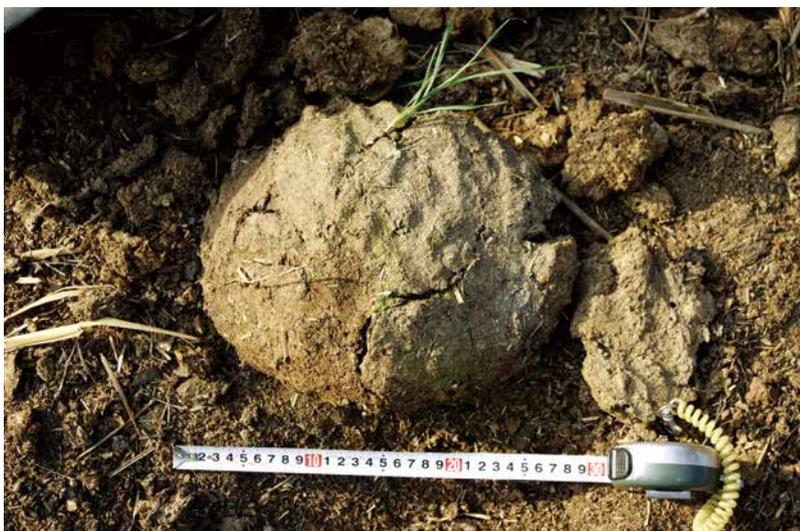
混ぜ合わせた糞と植物残渣は円盤状に成形され（牛糞ケーキと呼ばれています、写真②）、道の脇や屋根の上、空き地などで乾燥させたのち、半球状や台形状に積み重ね、さらにそれを泥や牛糞で覆い、雨季の間の保存に備えます（写真③）。覆いの表面には家庭ごとの文様や手形が施されることもあり、見ていて微笑ましいです（写真④）。近年はビニル製の覆いを用いることも多いです。これらの呼称は地方ごとに差異がありますが、例えばハリヤーナー州では牛糞ケーキはゴサ、保存用の積み重ねられたものはビトダと呼ばれています。牛糞ケーキを使用する際は、覆いを剥がし、少しずつ取り出します。これらもまた女性の仕事です。

牛糞ケーキ

牛糞ケーキの燃料として優れた点は、何よりその火保ちの良さにあります。燃焼温度自体はそれほど高いわけではありませんが（200℃程度）、長時間くすぶり続け、周りの環境にもよりますが、最長8～10時間燃え続けることが



写真①牛糞を混ぜ合わせる女性



写真②牛糞ケーキ

できます。その燃焼効率の良さから炊事や土器作り、嗜好品の水タバコの炭などさまざまな用途に活用されています(写真⑤、⑥)。

もちろん、木材を薪として利用する人びとも多くいますが、インドの村人が牛糞ケーキの利用をやめ、すべての村人が薪を用いていたら今頃インドの森林は皆伐されてしまっているでしょう。インド政府も村人もそのことは認識していて、法律では伐採は禁止されています(写真⑦)。インドの村の女性たちは、牛糞を無駄にすることなく毎日せっせと集め、牛糞ケーキを作り続けています。

余談ですが、コブウシは当地の多数派信仰のヒンドゥー教では神聖視されています。よって、その排泄物も浄性が高く、宗教儀式に用いられることもあります。写真⑧はその一例で、ヒンドゥー教シヴァ派の修行僧が集まるお祭りの1コマです。牛糞を盛んに燃やし、その灰を体に塗って清めています。

最後にもう1つ牛糞の利用方法を紹介します。牛糞は燃料以外に肥料になるのは言うまでもありませんが、さらに土間やカマド、壁の構築材としても利用されます(写真⑨、⑩)。牛糞に水と石灰を加え、地面に撫でつけ、乾燥させると丈夫で断熱、防虫効果のある床が完成します。乾燥地なので臭いはあまり気にならなりません。私はインドで発掘調査に参加する機会も多く、発掘

キャンプを作る際はこの牛糞の床作りからはじまります。インド農村部では宿泊は困難なので、遺跡のそばにテントを設営し、発掘の期間中ここで過ごします。ただし、乾燥させる前に上にテントを張ってしまうと少し臭います。このテントで3カ月は過ごすことになるので、この乾燥過程は重要です。

当地での生活を支える基層文化として、牛糞はこれからも活用され続けていくでしょう。

遠藤仁



写真③牛糞ケーキの保存 1



写真④牛糞ケーキの保存 2



写真⑤牛糞ケーキを用いた土器焼き

104



写真⑥牛糞ケーキを用いた炊事



写真⑦森林を守りましょうという看板





写真◎牛糞を用いた土間作り 1

106



写真◎牛糞を用いた土間作り 2